



公開講演会「ハチを語れば、世界が見える -私たちを取り巻く農業と環境保全の今-」開催

日本学術振興会国際研究集会「送粉者の保全に関する国際シンポジウム」の一環として、公開講演会「ハチを語れば、世界が見える -私たちを取り巻く農業と環境保全の今-」が開催されます。

日時：2012年1月29日(日) 13:00-17:00

会場：九州大学馬出キャンパス百年講堂中ホール1・2

対象：研究者、学生、行政関係者、NPO・NGO関係者、一般市民

参加料：無料 参加申込：不要

使用言語：日本語・英語（字幕スライド用意予定）

開催責任者：矢原徹一（九州大学理学研究院）

実行委員：川口利奈（九州大学理学研究院）、横井智之（岡山大学環境学研究科）

共催：DIVERSITAS、AP-BON、アジア保全生態学 GCOE（九州大学）

後援：日本応用動物昆虫学会、日本生態学会

Webサイト：<https://sites.google.com/site/pollinatorconservation/japanese>

■趣 旨

ハナバチなどの昆虫を介した農作物の花粉の授受（以下「送粉」）は、生態系から人類にもたらされる重要な恩恵のひとつです。人間の利用する全農作物の約75%は昆虫による送粉を必要とし、このサービスを金銭に換算すると、全世界で年間約19兆円にのぼると推定されています。また、送粉昆虫は多くの野生植物の繁殖にとっても必要不可欠な存在であり、陸上の生物多様性の基盤を支えていると言えます。しかし近年、人間活動にともなう生息地の分断化や破壊、環境汚染、外来の競争者や病原体の侵入などが世界各地で送粉昆虫の減少を引き起こし、生物多様性の維持や農作物の生産に悪影響が出はじめています。日本においても2009年春に花粉交配用ミツバチの不足が大きな社会問題になりました。

本講演会では、農作物や野生植物の送粉昆虫として認知度の高いミツバチとマルハナバチの話題を中心に、送粉昆虫の保全と持続的な農業利用に向けて、研究者、企業、そして市民がどのように連携して行くべきかを考えます。

■プログラム

- 13:00-13:20 はじめに
横井智之（岡山大学）
- 13:20-14:00 セイヨウオオマルハナバチが生態系に及ぼす影響の評価
五箇公一（国立環境研究所）
- 14:00-14:40 経済活動と環境保全の両立-マルハナバチを介した企業としての貢献-
光畑 雅宏（アリスライフサイエンス株式会社）
- 14:40-15:00 休憩
- 15:00-15:40 日本におけるミツバチ不足問題と今後に向けた取り組み
中村 純（玉川大学）
- 15:40-16:00 Bumblebee conservation in practice; the work of the Bumblebee
Conservation Trust（イギリスにおけるマルハナバチ保全トラストの取り組み）
Dave Goulson（スターリング大学）

【お問い合わせ】

大学院理学研究院アジア保全生態学 GCOE

特任助教 川口 利奈

電話：092-642-2751

FAX：092-642-2645

Mail：kawaguchi.rina.956@m.kyushu-u.ac.jp